

第3分科会「(大学で) 学ぶとは? 教えるとは? そして、良い授業とは?」(コーディネーター: 関口久雄)

近年「従来の受動的な座学から主体的なアクティブラーニングへ」等々、いわゆる大学での「授業、講義、実習、ゼミ、個人指導…」と称される《(相互) 行為》が大きく変化し始めている。また、今年度は、見えないウィルスとの対峙といった未曾有の状況下で、「教室、講義室、実習室、ゼミ室、研究室、大学の外、オンライン上…」のさまざまな《現場》で、改めて「(大学の) 教育 (の本質) とは?」が、自分たち自身の問題として立ち現れることとなった。この分科会では、報告者各自が、(大学) 教育の過去・現在・未来について、厄介なトラブル等が続発した一方で、いろいろな新たな可能性を気づかせてくれた2020年度を終えようとしている今現在、最も関心あることを発表し、参加者と共に考えていくことを試みる。

2021年2月21日(日) Zoomにて開催

14:10~14:30 報告1 小針 誠 (青山学院大学)

14:30~14:50 報告2 天野太郎 (同志社女子大学)

14:50~15:10 報告3 池田恭浩 (京都先端科学大学)

15:10~15:30 報告4 関口久雄 (京都先端科学大学)

15:30~15:40 休憩

15:40~17:00 参加者と共に考える

配布資料 (小針)

2021年2月21日 14:00~17:00
第26回 大学コンソーシアム京都・FDフォーラム (オンライン開催)
第3分科会「(大学で) 学ぶとは? 教えるとは?そして、良い授業とは?」

大学 (特に人文社会系) における「学ぶ」「教える」「良い授業」を考える

小針 誠 (青山学院大学)

0. 自己紹介をかねて : これまでの研究対象・研究課題
私立小学校の選択と入学選抜 (⇒『(お受験) の社会史』世織書房@博士論文、『(お受験) の歴史学』講談社選書メチエ)、子ども (⇒『教育と子どもの社会史』梓出版社・絶版。2021年内に増補版を刊行予定)、学び (⇒『アクティブラーニング』講談社現代新書) などについて、社会学的・歴史的な視点から捉えなおし、いま／この課題を明らかにしてきた。本務校は、2004年4月~2017年3月まで同志社女子大学現代社会学部に、2017年4月に青山学院大学教育人間科学部に異動、現在に至る。

1. 2つのタイプの「良い授業」論
演繹型「良い授業」論
最初に「ある状態」が想定され、その達成に向けて、特定の手法やプログラムなどを採用した授業や取り組み。アクティブ・ラーニング、ポートフォリオ、パフォーマンス評価、PBL、ルーブリック……昨今は特に「一斉授業／一発評価をどのように乗り越えるか」という問題関心に対して、(教育) 方法論・評価論で乗り越えようとする。授業改善のヒントとして参照することも可能だが、個別事例の紹介であったり、実践の根拠が示されることはあまりないため、方法・手法の形式化・形骸化に陥り易い。

帰納型「良い授業」論
個別 (自己評価) または集団 (授業アンケート) のなかで、高評価の授業や取り組みを「良い授業」として評価する方法。しかし、帰納的な推論以外の視点から「良い授業」像を構想することは困難であり、それを万人が実現できるかどうかともわからないし、却って技術的画一化に陥すおそれもある。

※いずれも、ある方法や手法を採用しても、それは個々には「良い授業」や高い成果を保証、意味するものであるとは限らない。

2. 授業の「良し悪し」を決める (と考えられてきた) もの
①学生の問題関心と授業 (特に内容) との関係
←演繹型「良い授業」論から得られるヒント
②特定の手法や方法
←帰納型「良い授業」論から得られる推論
③授業に対する評価・効力 (自己評価を含む)
④その他
教員と学生との相性?

※学生が学んだか (あるいは教える一歩前関係を成立したか) どうかの判断は、学生側の事後的な判断 (主観のレベル) と教員側の評価、そしてその双方を通じてなされる。したがって、教員の自助努力 (FD) を含む授業改善だけでは、どうにもならないことも多いのではないかな。

→アカデミック・フリーダムへの過剰介入ないしは形式主義に堕している日本の大学の「FD講習会」なるものに対して、わたしは懐疑的な立場である。

1

2021年2月21日 14:00~17:00
第26回 大学コンソーシアム京都・FDフォーラム (オンライン開催)
第3分科会「(大学で) 学ぶとは? 教えるとは?そして、良い授業とは?」

3. 学生が「学ぶこと」による実感・実力・実質 (「三実」?) をどう担保するか
①前提条件 (学生の学習期待・予備知識や促進・阻害要因) を把握する (→多様化する学生)。
②教育や授業における What if 的発想 (～したら…になる) はやるべき。
③授業方法の改善は必ずしも (学生にとっての) 「良い授業」を意味しない。
④100%狙いの「良い授業」はありえない。

すでに①~④は、多くの大学教員が経験上十分に理解、実践している事柄であり、やることはやりきったのではないかな。これ以上の介入は好ましいとは思えない (理由は先述の通り)。したがって、「良い授業」に向けた促進要因とともに／よりも、構造的な阻害要因を減じる方向を検討すべきではないかな。

4. 日本の大学における「良い授業」の構造的阻害要因
①単位制度 (大学設置基準) の形骸化
1単位=45時間の学修? 半期90分授業×15回=2単位 2単位×62科目=124単位+α
②過剰な授業負担
学生: 履修科目の多さ ⇔ 教員: 授業+研究+諸業務
お互いが望む「良い授業」「良い学び」を実現するためのゆとりとサポートが必要。
今回のコロナ禍で「課題地獄」を拒く一因になった。年間、学期、一週目の「適度な課題」はどの程度なのか。

③多すぎる履修者数
教員一生間、学生相互のインタラクションを妨げる一因になっていないかな。
④授業／学びの構成の〈情報番組〉化 (＝学際化?)
1限・生物学<ニュース>→2限・教育学<芸能>→3限・歴史学<料理>→4限・文学<旅>→5限・経済学<教養情報>…それぞれの授業<コーナー>は面白いが、長時間の受講<視聴>後に、内容がほとんど残らない、それ以上の (リ) アクションが起きない、出席・聴講<視聴>するだけで自己完結、満足してしまう。

⑤学びや思考の形骸化
・教員側の「一方的な教え」重視の授業 ⇔ 学生側の「主体的な学び」とトレードオフな関係?
・「考える」機会の欠如と一向に深まらない多・浅・広な学び
→「役に立つ授業」=「答え」を与えてくれる授業 = 考え (させ) ない授業?

※多・広・浅から少・狭・深のカリキュラムの構造転換へ

2

2021年2月21日 14:00~17:00
第26回 大学コンソーシアム京都・FDフォーラム (オンライン開催)
第3分科会「(大学で) 学ぶとは? 教えるとは?そして、良い授業とは?」

付論 コロナ禍・ポストコロナの大学教育のあり方 (特に授業のオンライン化) をめぐって
未来や将来のことはよくわからないが、やはり今回のコロナ禍がオンライン授業の実施とともに大学教育のあり方 (学ぶ、教える、授業) を大きく問い直す契機にならうとしている。

①授業のあり方の問い直し
これまで「対面」による講義・演習が当たり前とされてきた大学の授業に、「オンライン」という手段・方法が広く普及した。それは対面による口述と文字 (紙媒体と板書) に限定された授業のあり方に、オンデマンドの動画や音声に伴うものとなった。講義では、同時刻に同教室に集い、リアルタイムで対面する必要はなくなった (時間と空間の分離)。演習やアクティブラーニングも、リアルタイムを前提に、教員と学生に相応の知識・技能 (と意欲) があれば、オンライン上でも実施可能であることを示した。

②人間関係のあり方 (教職員・生間、学生間) の問い直し
対面授業が前提としてきたリアルな人間関係や、大学 (学部・学科) やキャンパスという具体的な場への所属を通じて、各自のアイデンティティを確認してきた多くの学生は、ICT 活用と自己責任の学びに放り出され、関係や所属からの「疎外」という社会心理的な危機に直面した (特に新入生)。

③コスト (負担・負荷) のあり方の問い直し
ソフト (教育) に対する公的な補助金や私的な学納金の対価の問題、ハード (校舎や教室などの大規模設備など) をめぐる公私にわたるコスト、そのうちのひとつは資本主義批判 (脱成長) としての環境問題 (CO₂ 排出) などの問題も提起してはいないかな。しかし、公的なコスト削減を突き詰めていくと、公教育のコスト縮減を狙うネオリベ教育改革・政策と共振するおそれもある?

その良し悪しはさておき、今後は以下 A~C の論点を中心に事態の推移を見守り、考えていきたい。

A 「よい授業」の実現に向けた方法と価値の多様化…各大学や教育行政 (文科省) はどう対応するのか。諸外国 (特に欧米) はどのように対応していくのか。

B 大学教育と初等・中等教育との関連…本年4月より中学校、2022年度より高校の新学習指導要領が実施されるが、早くもポスト「主体的・対話的で深い学び」として、ICTの活用による (公正で) 個別最適化の学びが次期学習指導要領のキー (バズワ)・ワードになりつつある。それ以前より、全児童・生徒にパソコンやタブレット端末を配付・活用する GIGA スクール構想 (文科省) や「未来の教室」(経産省) などの諸政策が動いており、GIGA では本年度中に全員に端末配付完了を予定しているというが、……、それに伴い、高等教育は初等・中等教育改革から突き上げられるかたちで、それまでの方向とは性格を異にする改革 (対話→個別?) を求められるのか。それは同時に、今般の「主体的・対話的で深い学び」との連続または断絶についても問うていかなければならないことを意味する。

C (物理的) 施設抜きの大学教育の構想…これまでの大学教育が施設 (教室) における対面を基盤にしながら展開してきた共通性 (common)、公共性 (public)、公平性 (equity) の価値や実践はどのように変容するのか／しないのか。ネオリベ教育政策・改革の萌芽として、オンライン化には、②を根拠に、抗うべきなのかどうか。あるいは様々な妥協の帰結として、コロナ前の「日常風景」に戻るのだろうか。

3

(大学で)学ぶとは？教えるとは？そして、良い授業とは？

事例報告：「大学外での」学び 地域連携型授業のありかた



天野 太郎 (同志社女子大学・現代社会学部社会システム学科)

地域連携型教育プログラムの課題

- 2：地域連携—地域への可視的・継続的なメリットの提供が可能なのか？

- 学生との交流・提言・活動への参画で実現
- 変化する地域のニーズに対応する大学の力？

学生の学び・・・地域・社会のなかでの育み

↑
大学・教員のサポート

【問い】

(大学で)学ぶとは？ 教えるとは？

そして、良い授業とは？

【答え】→今のところの...(仮説)

授業者の数だけ良い授業がある

授業者は職人である...(大学で)は？

授業の概要：プロジェクト演習Ⅰ・Ⅱ

北海道富良野地域を対象
2006年～現在
観光を通じた地域連携型学習からスタート
↓
観光から地域活性化の重視へとシフト



- 現地学習：7泊8日
- 事前・事後学習 合計3日間
- 事後プレゼンテーション報告：2018年度
町家講演会1回
京都市大学地域サミット報告1回
大学コンソーシアムFDフォーラム1回

対象学生：2年生～4年生・16名
*2019年度は応募者18名・選考

報告資料抜粋 (天野)

大学に必要なのか？

大学における授業とは？ 大学設置基準

(授業の方法)

第二十五条 授業は、講義、演習、実験、実習若しくは実技のいずれかにより又はこれらの併用により行うものとする。

能動的学修(アクティブ・ラーニング)への転換

【どのようにして？】

講義、演習、実験、実習、実技の枠の中で改善？
それとも、新たな授業の形態を創造するのか？

報告資料抜粋 (池田)

2019年度 中富良野町にて
町長・町議会・役場関係者向けのまちづくり提言



- 地域の課題を、京都での経験や大学生の視点から提言
- 政策提言の実践 2018・19年度は富良野市で

2021.2.21 第26回FDフォーラム 第3分科会

(大学で)学ぶとは？ 教えるとは？

そして、良い授業とは？

京都先端科学大学 人文学部(教職課程専任)

池田 恭浩

授業者の数だけ良い授業がある

能動的に学ぶ：再構成する

考えを出し合い練り上げていく授業

<入力(input)と出力(output)が必須>

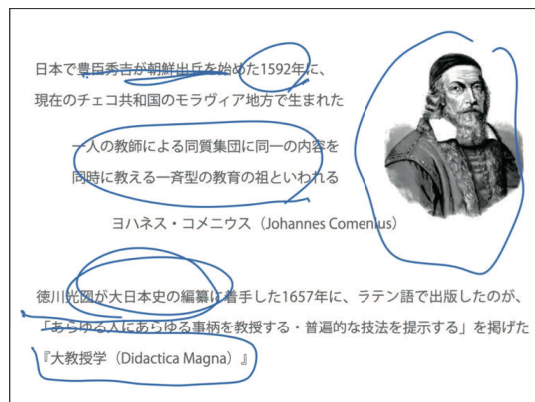
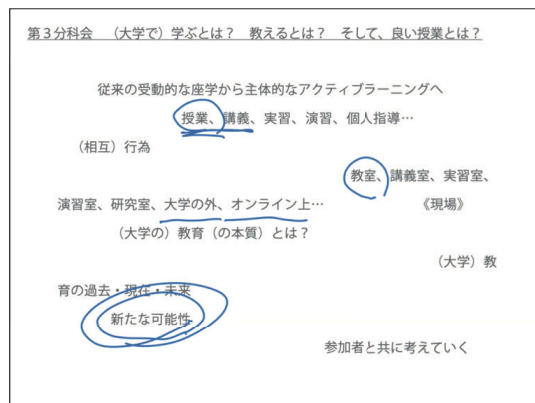
学生の言葉・学修時間

芸術性や不確実性

授業者の技術(アート)...職人

大学に必要なのか？

参考資料（関口）



【大学が文字通り普遍的な教授方法をもつこと。大学が守らねばならぬこと】大学の仕事が案に運ばれて実り多いものとなるには、第一に、選ばれた知能の持主 いわば人間の精華だけに入学を許すことです。それ以外の者は、その生まれつきに応じて 農業に 手工業に 商業に従事させます。

しかしながら、大学が研究の熱意と品性とをそなえた・創造的な人間だけを養成するものであるように、心を配らなくてはなりません。親の金と時間とを無為贅沢に浪費してほかの者の・悪い手本になるような にせ学生を放っておいてはならないのです。ペスト菌がいなければ感染ということもありませんし、全部の学生が研究に専心できるのです。

第3分科会雑感

Zoomを用いて、予定通り、まず、4名の報告者が20分ずつ各自が現時点で関心あることを報告、休憩を挟み、形式上コーディネーターが進行役を担い、80分間、報告者・参加者共に自由に話し合いを。計3時間、のべ141名が参加、大きなトラブルもなく無事終了。参加者たちのアンケート結果によれば、進行役のコーディネーターの統率力のない進め方以外は、概ね良い評価だったようである。ただし、その進行の不味さ、というよりも、進行をしなかったのは、あえて選択した方法でもあった。

まず、「参加者と共に考えていく」と提示していたように、このような分科会の通例、少数の報告者の一方的な講義を単に聞くではなく、今回はあくまでも80分間の報告者・参加者、その場にいる全員の自由討論が主目的であった。それとともに、偶然の要素がそこに加わった。本来ならば、大学に所属する教員と職員を中心とした大人たちが集う場のはずだったが、ある現役の大学生が参加、大人たちがいつのまにかあたりまえと受け入れてしまっていた、素朴で根本的な疑問を投げかけてくれることによって、その場を活性化してくれたのである。

そもそも、この第3分科会は、前年の3月1日に開催されるはずであったが、FDフォーラム自体が、やむなく中止された。その時の幻の企画が「アクティブラーニングは、大学に必要なのか？」であった。〈近年、いわゆる大学の授業が、従来の受動的な座学から、主体的な「アクティブラーニング」へ、と大きく変化し始めている。ただし、それらの改革について、いわゆる大学人たちは、きちんと自分たちの問題として考えたことがあるのだろうか。たとえば——喧伝される「学修」を経験すれば、「新しい学力」が身につく、「学ぶ意欲」「生きる力」が高まるのか？ そもそも「誰が」「どんな目的」で為された改革なのか？ そして、いわゆる社会経験が乏しいとされる大学教員たちが、主体的・対話的が求められる現実的な時間を、「容易に」「短時間で」ファシリテートすることが可能なのか？ この分科会では、そのような新しい教育の流れを歴史的に検討し、普遍的で実践的な決して新しくはない教育活動の報告等を通して対峙することによって、大学で学ぶ、とはどういうことなのか、を改めて考えてみる。〉[大学コンソーシアム京都 第25回FDフォーラム 第3分科会 概要]。その同じメンバーで、改めて、仕切り直したのが、今回の「（大学で）学ぶとは？ 教えるとは？ そして、良い授業とは？」なのである。

興味深いことに、アンケートの肯定的な意見は「予想外のサプライズな時間であった」、逆に、否定的な意見は「良い授業とは？という課題が解決していない、スムーズに進行していない」。つまり、それらは表裏一体、いわゆる「目当て」「段取り」を極力排除したことに対する「新鮮／拒絶」な反応であった。平時ならば、京都のどこかの大学で対面で開催されたはずが、リモート開催での参加という状況を強いられ、さらに、通常と異なる自由な討論で、異文化な参加者も加わり、結果的に、従来の予定調和の分科会とは程遠い「ワクワク／不安」を伴う、いわゆる「アクティブラーニング」が求める、系統的ではない学習を体感するワークショップの時空間になってしまったのである。

いずれにしても、いわゆる結論へと導くことはしなかったが、参加者たちは、さまざまな議論から、大学における教育の実践は、まだまだ発展途上であることは確認できたはずである。報告者の1人、元小学校教員の池田恭浩が自身の経験を踏まえながら、「授業者の数だけ良い授業がある。授業者は職人である」と提起したが、これから大学教員たちは、小中高の教員たちのように、教育の職人＝プロとしての道を歩むのであろうか、歩めるのであろうか、その覚悟があるのであろうか、それらが問われているのであろう。

（文責：関口）